シーボルト生誕二百周年記念号
『鳴滝紀要第六号』

シーボルト生誕二〇〇年を記念して、シーボルト記念館の『鳴滝紀要』が特大号を刊行した。その中には、六つのあいさつと九論文が収載されている。紙幅の関係上、二論文だけを紹介するが、この二論文以外に、向井晃、中西啓、石山禎一、山口隆男、沓沢宣賢、梶輝行、徳永宏氏の論文が収載されている。

我々医史学会員にとって最も興味深い論文は、ライデン大学のハルメン・ボイケルス教授の「医者としてのフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト」であろう。しかし、読んでみて正直言ってがっかりした。訳が悪く、意味が通じない点がある。

シーボルトが活躍した一九世紀前半のヨーロッパの医学界は、いまだ内科学と外科術が異質の学問・技術で、内科医と外科医が所属階級の異なる異質の職業であった。それを理解せずに翻訳したものだから、内科(medicine)、内科医(physician)、外科、外科学に関する訳語に多くの誤訳が生じてしまった。タイトルの医者からして、医師と翻訳すべきだし、内科医をあろうことか、物理学者と翻訳した箇所(五一頁、後から三行目)すらある。内科と翻訳すべき語を医薬(四七頁、後から三行目、および五一頁、後から五行目)とし、内科的を薬(同頁、後から四行目)とし、外科的を手術(同頁、後から三行目)とし、外科医を医師(同頁、後から三行目)と誤訳している。

これ以外にも誤訳が散見される。例えば、医学教育を医療指導(四九頁)とし、供覧と翻訳すべきdemonstrationを公開治療、あるいは実践(いずれも五〇頁)とし、著者を作家(五〇頁)とし、近代的を現代の(五一頁)とし、基礎医学を基本的な医療科学(四六頁)と誤訳している。これ以外にも翻訳不可能であったオランダ語とラテン語(決して難解な語ではない)が、原語のまま日本文の中に残されている。ただ良心的なことに、原文の英文が日本文の後に収載されており(そのため誤訳が指摘出来たのだが)、英文を正文として読むと、内容が理解出来る。

シーボルトが有効な牛痘ワクチンで種痘を行なったとの記載(四九頁)があるが、これは日本では認められていない史実である。著者のボイケルスにこの部の真意を問い合せる義務が、編者にあっただろうと考える。

塚原東吾氏を筆頭に東大大学院生を中心に八名の連名の「科学史の側面から再検討したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの科学的活動—植民地科学、ベーコニアン科学、フンボルティアン科学とシーボルトの科学的活動との関係についての試論」がある。この論文のどの部分でも良いのだが、例えば二〇二頁を引用する。「科学史でのクーニアン的方法論のアナール・ニューヒストリシズム的な展開への並行的努力と考えられるのは、科学社会学のストロング・プログ

ラムを提唱しているイギリスのエディンバラ学派による科学の社会的機能のラジカルな分析にみられる方法論である。」

昔読んだ、分裂症患者の書いた文章を思い出した。これは一体日本語であろうか。概念を提示せず、カタカナ技術用語を頻出させ、取り入れたばかりの知識をひけらかし、文章が生硬で、論理が飛躍する。自分たち以外の学派の研究者に理解、納得させる意図も能力もない悪文で、東大大学院生を中心とした若手が、このような作文を書くとは非常に残念である。また、編者はどの程度、この作文に対し干渉したのだろうか。編者は「裸の王様」も見破ることのできない、権威に従順な大人であってはならない。

他の七論文は、史料に基づいたオーソドックスな論文で、信頼に値する。

（石田　純郎）

〔シーボルト記念館：長崎市鳴滝二―七―四〇、電話〇九五八―二二三―〇七〇七、一九九六年三月、A5判、二八七頁、二、二〇〇円〕

唐沢信安著

『済生学舎と長谷川　泰―野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学校―

いまから半世紀ほど前では、街なかの開業医には未だ医術開業試験に合格した老先生方が居られた。この方々はどういう訳か、「検定医」と云われていたような気がする。

いわゆる第一線の医療を明治十年代から七十五年近くも守り続けてこられた医術開業試験合格の臨床医の方々は、大半が済生学舎の出身と聞き及んでいる。

明治九年、西洋医学を習得した開業医の急速な養成がのぞましいとする社会的要請にこたえて、長谷川泰が開設した私立医学校が済生学舎である。大熊房太郎（医事評論家）流にいえば、〝医術開業試験を受けるためのいわば予備校のようなこの学校〟では、明治三十六年に廃校されるまでの入学者は、二一、四九四人に達し、試験合格者は九、六二八人に及んだという。

このように国民医療に大貢献した済生学舎も、つい二十年ほど前は、本郷のどこにあったか実は判然としていなかった。順天堂医院または東京医科歯科大学病院の裏手であろうという程度の認識しかなかったのである。このような問題を、ここ約十年をかけて唐沢信安先生は東京都公文書館に通い続け、更に学舎の関係資料を全国的に足で収集され、済生学舎創立百二十年目に当たる平成八年に、『済生学舎と長谷川泰』―野口英世や吉岡弥生の学んだ私立医学校―と題して一冊にまとめられ、日本医事新報社から上梓された。

この本を読ませていただいて、まず感ずることは、済生学舎創立当時の長谷川泰の情熱に負けない、唐沢先生の母校のルーツ解明に向けた情熱の激しさである。

学識すぐれ、魅力ある風格をそなえた医育者が輩出した明治期の、医育界の歴史を知らなくとも、この本を一読すれば